

## 5. 障がい者スポーツにみる 視覚障がいについて

清水朋美\*

### ●はじめに

視覚障がい者が取り組んでいるスポーツは非常に幅広く種類が多い。視覚の代償として、ルールに聴覚や触覚の活用を取り入れ、さまざまなスポーツにチャレンジすることが可能である。スポーツの目的も、健康増進から競技スポーツまで幅広く、年代を問わずスポーツを楽しむことができる。特に中途視覚障がいの場合には、受障後の心理反応として、あらゆることに対して否定的になる傾向が強く、人生の生きがいを見い出すことも大切になるが、スポーツも立派な選択肢のひとつである。

競技スポーツでは、障がい者スポーツ特有のシステムであるクラス分けが必要である<sup>1)</sup>。クラス分けには、国内・国際クラス分けと障害区分がある。国内・国際クラス分けは、各種大会の直前にクラス分け委員が実際に選手の視機能を検査、診察して、選手の適正なクラスを判定する。障害区分は、全国障害者スポーツ大会の前に福祉や障がい者スポーツ関係の職員が、手帳の情報を基に区分を行う。クラス分けの基準は、身体障害者手帳(以下、手帳)の基準とは全く異なるため、知識を整理し

ておきたい。

### ●視力と視野

視力と視野は、視機能評価を行う際に欠かせない基本データである。視力は、2つの点を分離して見分ける能力であり、2点が眼に対して作る角度を最小可視角という(図1)。視力は、最小可視角の逆数で表される。視野は、目を動かさずに見える範囲のことである。視覚障がいの程度を評価するには、視野を全体的に調べられるゴールドマン視野計での測定結果が主である。視野の範囲を確認する際には、同じ数値の度であっても直径か半径かで範囲が異なるため、留意が必要である(図2)。

いずれの検査も、眼鏡やコンタクトレンズで視力矯正して得られた最良の結果が用いられる。つまり、視機能評価には、裸眼視力ではなく矯正視力が大切である。

### ●手帳とクラス分け基準

日本の手帳は、視力は両眼の視力の和、視野は両眼の視野の範囲が判定基準となっている(表1, 2)。国内・国際クラス分けと障害区分は、良い

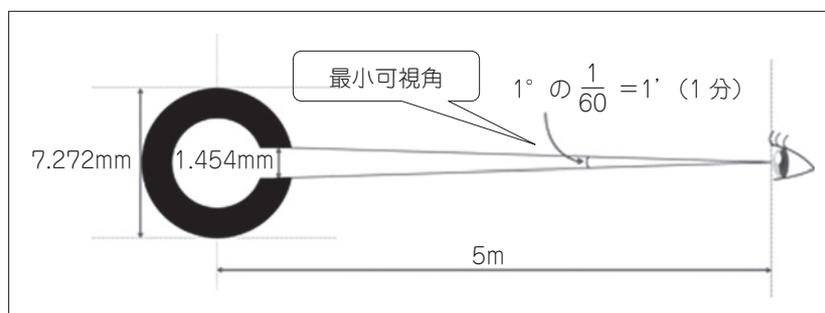


図1 視力1.0の例  
最小可視角(分)の逆数が視力である。

\* 国立障害者リハビリテーションセンター病院第二診療部眼科

5. 障がい者スポーツにみる視覚障がいについて

表2 手帳基準 vs 国内・国際クラス分け基準と障害区分 (視野)

手帳基準	
2級	両眼の視野がそれぞれ10度以内かつ両眼による視野について視能率による損失率が95%以上のもの
3級	両眼の視野がそれぞれ10度以内かつ両眼による視野について視能率による損失率が90%以上のもの
4級	両眼の視野がそれぞれ10度以内のもの
国内・国際クラス分け基準	
B2	視野直径10度以内
B3	視野直径40度以内
障害区分	
区分2	視野5度以内
区分3	視野20度まで

手帳基準は両眼の視野，国内・国際クラス分け基準と障害区分は良い方の眼の視野でそれぞれ判定を行う。

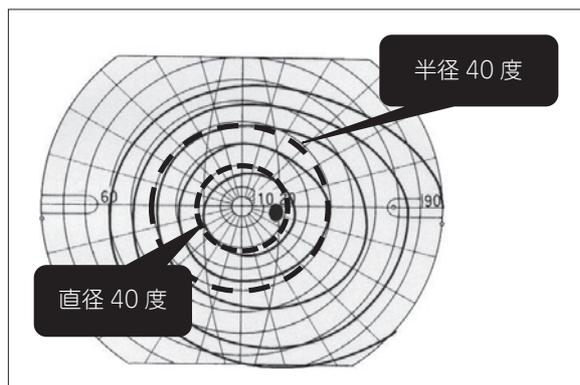


図2 視野と範囲  
ゴールドマン視野計で測定された正常右眼の結果。耳側15度の暗点は、マリオット盲点である。視野の範囲は、同じ数値でも直径と半径で範囲が異なる。

表1 手帳基準 vs 国内・国際クラス分け基準と障害区分 (視力)

手帳基準	
1級	両眼の視力の和が0.01以下のもの
2級	両眼の視力の和が0.02以上0.04以下のもの
3級	両眼の視力の和が0.05以上0.08以下のもの
4級	両眼の視力の和が0.09以上0.12以下のもの
5級	両眼の視力の和が0.13以上0.2以下のもの
6級	1眼の視力が0.02以下，他眼の視力が0.6以下のもので両眼の視力の和が0.2を超えるもの
国内・国際クラス分け基準	
B1	視力0.0025より悪い
B2	視力0.0025から0.032まで
B3	視力0.04から視力0.1まで
障害区分	
区分1	視力0から光覚弁まで
区分2	視力手動弁から0.03まで
区分3	視力0.03から視力0.1まで

手帳基準は両眼の視力の和，国内・国際クラス分け基準と障害区分は良い方の眼の視力でそれぞれ判定を行う。

方の眼の視力，視野で判定する<sup>2)</sup>(表1, 2)。また，視野評価の視標は，手帳，国内・国際クラス分け，障害区分とすべて異なる(図3)。特に障害区分では，手帳から得られる情報で判定していくため，特に視野障害の場合には現基準では判断が困難であり，基準の改善が検討されているところである。

●おわりに

日本の手帳基準と考え方が異なる上，視覚障が

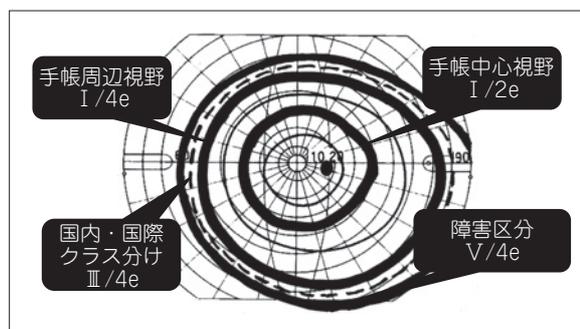


図3 視野基準の違い  
ゴールドマン視野計で測定された正常右眼の結果。ゴールドマン視野計では，明るさとサイズが異なる各視標で測定を行うが，手帳基準，国内・国際クラス分け基準，障害区分ではそれぞれ基準となる視標が異なる。

い者スポーツに関する視機能評価基準は統一されていないため，現場では判断に迷うことも少なくない。近い将来，よりわかりやすく誰でも理解しやすい基準が導入されることが期待される。

文 献

- 1) 大久保春美：障害者スポーツ指導教本 初級・中級<改訂版>。ぎょうせい，東京，23-26, 2012.
- 2) 西田朋美：特集：スポーツ視覚研究の最前線 視覚障がい者のスポーツ。臨床スポーツ医学 32(12): 1176-1181, 2015.